

津中務太輔忠豊」新納武藏守忠元 伊集院肥前守久信 村尾源左衛門
 入道松清 入来院又六重時 比志嶋紀伊守国貞 伊勢兵部少輔貞昌 嶋津圖
 書頭忠長 嶋津右馬頭征久 樺山權左衛門久高 三原諸右衛門重種 嶋
 津河内守忠信 町田勝兵衛久幸 喜入撰津守忠政 鎌田出雲守政近 山
 田弥九郎有栄 称寝七郎重張 村田形部太夫 桂式部太輔 上井仲後
 敷根仲兵衛 川田大膳正 肝附伴兵衛 阿多長寿いん 中原中将坊 種
 子嶋左近正 平田民部左衛門 平田太郎左衛門 市木小八 相良新右衛門 役者ナリ 本
 田與右衛門 本多甚右衛門 比志嶋紀伊守國貞 伊勢兵部少輔貞昌 白濱次郎左衛門
 同氏助七」白坂甚兵衛 三原諸右衛門 嶋津河内守忠信 町田勝兵衛久幸 喜入撰津守忠政 鎌
 田出雲守政近 嶋津右馬頭征久 額娃弥市郎 吉留奎右衛門 嶋津豊後守 敷根二十
 郎 嶋津藤次郎 村田刑部太輔 岩切雅楽頭 鎌田玄蕃守 平田河内守 桂民部
 少輔 根占七郎 嶋津源七郎 濱田民部左衛門 濱田民部左衛門 黒田喜兵衛
 吉留弥市 上井伊豫守 上井次郎左衛門 川上源太郎 佐多太郎次郎
 樺山權左衛門 新納新八 比志嶋宮内少輔 柏原將監 伊集院肥前入道 町田源左衛門 菱
 刈伴右衛門 町田源左衛門尉 喜入吉兵衛 肥後長次郎 仁禮小吉 新納
 尾張守 大田吉兵衛 川上又左衛門 新納尾張守 川上十郎左衛門 川上四郎
 兵衛 大嶋孫太郎 川上四郎兵衛 高崎弥六 弟子丸右京 村田三郎右衛
 門 藥丸老岐守 柏原將監 相良勘解由 鎌田加賀守」有馬次郎右衛門 曾木甚
 右衛門 猿渡新助 本田与兵衛 鮫嶋筑右衛門 伊十院助右衛門 猿渡新八
 黒葛原晴八 野村但馬 谷山宮内左衛門 野村但馬守 東郷久半入道 吉利休兵衛
 町田甚兵衛 伊集院長次郎 山田弥九郎 野村宮内少輔 米良主水助 米良

縫殿助 北原土佐守 高城孫右衛門 種子嶋次郎右衛門 有川七郎 潜
 良善助 押川強兵衛 久保七兵衛 宮原秋之助 久保七兵衛 本多準人正
 國分丹波守 寺山四郎左衛門 本多出雲入道 本田与助 築瀬兵右衛門
 松崎采女正 指宿采女正 久永吉左衛門 加治木兵太左衛門 大山稻
 助 児玉新四郎 吉利」左近 丹生助右衛門 伊地知四郎兵衛 川上
 右京進 伊地知彦七 吉村喜兵衛 川上藤右衛門 野村市右衛門 有馬
 嘉右衛門 入佐助八 野村才右衛門 東郷十左衛門 市来七左衛門 小
 嶋源七 い地知彦八 肥後与右衛門 四信丹波守 吉利寛右衛門 吉留
 大内藏 川越民部左衛門 平田与吉 鈴木宇左衛門 法元左近兵衛 鹿
 嶋助三良 伊藤善左衛門 大野弥三郎 山鹿弥助 本多甚兵衛 伊集院五兵
 衛 八木丹後守 市来孫右衛門 春田主左衛門 鎌田四郎左衛門 山鹿
 弥助 森寛左衛門 種子嶋十郎次郎 同甚助 以上薩隅日三州」
 (注) 鹿兒島県立図書館蔵本(口)は以下を欠く。
 (34・ウ)

最後になったが、貴重な資料の翻刻をお許し下さった鹿兒島県立図書
 館、対校本としての使用をお許し下さった東京大学史料編纂所、及び、
 便宜をおはかり頂いた児島正憲氏、山口隼正氏に厚く御礼申し上げます。

恥心を恥て弥無二心事を軍功於可厲由稠敷申合ける 先都城二成ハ太将
忠真居城を要害を堅く相構へ楯て籠る 士卒にハ邪答院右京 北郷與
右衛門 東郷彦右衛門 田原勘右衛門 葉丸四郎右衛門 東八良兵衛 伊
集院新右衛門 小川伴助 内村半平 上原 清右衛門 上村奎之
助 同ク仁右衛門 中條助八 上野團之助 東勘兵衛 白石
太郎左衛門 中村吉右衛門 東條万左衛門 息六左衛門 其外重恩の臣
下北郷 居付の士卒相交て大勢都城へ楯籠る 其脇城を記に先高城二
比志嶋清安 同久次郎 小牟田清五左衛門 山之口には倉野七兵
衛 樗木主水助 息堅助 勝岡には伊集院如辰 朝倉十助 中俣玄蕃
志和地にハ伊集院掃部助 春成一忠 門木治右衛門 山田之城には長崎
治部 息休兵衛 中村与右衛門 野々美谷二是有屋田太炊左衛門 古垣
從齊 息 与兵衛 安永二ハ伊集院五兵衛 白石永仙 中山平太夫
財部二ハ伊集院惣右衛門 龍聞平三 梅北之城二ハ日置善右衛門 同覺
内 渋谷仲左衛門 築瀬何某 梶山には野邊彦市 息金左衛門 谷口丹
波 同伊豫 末吉之城には伊十院小傳二 伊集院兵部 川添源太
大始良八郎右衛門 以上拾式外城然と取拵へ要害堅く相構へ去ル潤六
月廿日より福山坂の上より通路 押塞に依而往来曾て 断絶
忠真已に都城西之城ニ立馬を定て三拾式足五口の城戸に柵を振り番所
の符を定め武者頭に若武者餘多 相添へ夜に無懈怠驚固しける 早
逆心之儀無隱他国へ 洩聞へけれハ依之庄内陳外城之城主皆々
その在所を致普請ける 諸軍勢を催さんとす 依之守護方の城主を記に

志布志には樺山權左衛門久高 松山二ハ柏原将監 串良城には嶋津圖書
頭忠長 廻には山田弥九郎有栄 高原二ハ入来院又六重時 飯野城二ハ
伊十院元巢惣職 中原中將坊 野尻二ハ數根仲兵衛 穆佐にハ川田大膳
正 須木二ハ村尾源左衛門入道松清 小林二ハ上井伊豫守 同次郎左衛
門 恒公之御出馬を奉待ける 忠恒公日州御出馬之事
去ル程に慶長四巳年六月上旬少將忠恒公は鹿府御出馬にて福山坂之上よ
り通路なきに依て真幸院之様に御打通有て日州東霧嶋金剛佛寺を御陳
に御取有之 東霧嶋へ少々籠居たる敵の雜兵を追散させ給ひける
郡米良之住人米良主水助藤原重隆 同舍弟縫殿介 重供之儀は二男の
故 此度の合戦に加勢仕 幕下に可參とて軍勢一千人引具して東霧嶋之
御陳へ參上也 依之嶋津の下臣となりて知行千石被宛行也 爰に又筑後
国柳川の住人山鹿弥助と申は立花家の臣下と致口論柳川を出て薩州を頼
召仕御意二而 知行八百石被宛行 今に臣
下と成て今度の軍に御供也 先御陳に籠る士卒には日州都於郡佐土原嶋

速々參入可仕之處二病氣

鹿有之故參上仕儀不能成之由申遣ける 重て兩度に及使者有之 雖然北原不致參入」^(27・オ) 依て忠真大ひに立腹して扱は心替疑ひなしとて打手を可向に定りける 北原此由傳聞急き鹿府へ夜中二走て参り比志嶋紀伊守国貞へ申けるハ忠真逆心を企由被申ける

⑤甚敷候 快氣次第伺可申段被申候 二度之使にも不参候 僅は彼は可為別心候間急々可討果由忠真下知ニ而人数被差向 此由北原承夜中二鹿兒島へ与風参比志嶋紀伊守へ忠真逆心事疑無御座通段々具

二被申上候

紀伊守大に驚き急き義久公へ言上被申ける 龍白公當時山城之國伏見え被成御座候

義久公彼聞召上 其儀二有けるかと少も御さなき 何様忠真鹿府に被召寄実不真御極可有とて忠真御用有之 依之早々可有参上之由御使者有 其時一門諸臣下都城え馳参事如何」^(27・ウ) 可有と参上之評定有時二白

石永仙進出て申けるハ 先以鹿府へ御参上之儀もつたひなき御事也

何様鹿府え召寄られ御誅代可有との御所存なり 某憚多乍事所存之通

可申 先庄内拾式外城を取持給ふて御親父幸侃の弔合戦を被成 其上二

而運命尽於不叶は御切腹可然存と無憚所申ける 被候 尤可然と同心也 依之伊

時に一族諸臣下皆一同二 此儀 民懸合勝

集院新右衛門被申けるハ 味方無勢にて多勢二御合戦叶間敷と存也」^(28・オ)

終二は可為負 其上為臣君に奉向弓を引事古今為吉礼す 人為之せざる事なり幸侃も被成御成敗程之重罪但野心賊

忠真も世人彈指而未代二惡を取可給事非口惜事哉 幸侃ハ薩隅日三州の臣下の統領にて雖有

之御誅代に不被行して不叶惡逆可有御座と可被思召 唯命を任主君御参上可然存候 忠真の御事には少々忠恒公之御妹婢二而有之故御身之上におひてハ餘り御大事ハ御座有間敷と存也 忠真一人御切腹雖有と御子孫永く當地庄内の領守たるへし 依之子孫永く榮花に盛るを以先祖への孝行と申者也 争只無仕出儀もして及一戰當家令断絶こと」御先祖不及申幸侃も草の蔭にて左社ほひなく可被思召と存也 科有る親を殺し忠有子を被召仕儀異国には不及申我朝ニも其例多シ 其上御名ハ後世に止てよろしかるへしと 無餘儀被申上ける

鹿其時一門諸臣下此由を聞 新右衛門被申儀無 甲斐武士之所存 臆

病いたす所也 平生御恩多日御精刀此時也

⑥新右衛門被申分其いはれなきにしもあらずと云人ハ少ク

白石永仙評記尤至極なりと皆一同二被申ける間此儀二定り五口 十二 の外

城の士卒并足輕等に至まで」^(29・オ) 一七日之内に忠真自配にて酒を進め 被頼候

けるハ弥以 一味に同心持歸腹せしめける 北郷普代居付の者二は忠

真普代の家臣の知行に四部一増して被宛行ける 北郷領八万石の時八千八人國元

に八千人為 由也 北郷臣下一万六千人の内居付之者一萬五千人と聞へける

居付之者に忠真自筆二也相當ニ加増の切紙宛行 其上武器等は不及申銀

錢等を被宛行ける 若シ 北郷居付の者共逆心に於有之ハ可為捨と毎度堅

く觸渡されける間耆人も逆心の者ハなかりし」^(29・ウ) 或は兄弟有者は北郷方

に相隨ひ宮之城に移りけれハ居附になりて伊集院方へ從ひける 或は親

伊集院方へ居付なれハ子共ハ北郷方へ從ふ 宮之城に移けれハ互に名を

より伏見へ罷登る也

山城之國伏見より幸侃内室飛脚都城へ下着源次郎忠真逆心之事

去程に三月廿日夜半計に山城之國從伏見幸侃内室都城え飛脚下着二付源

次郎并小傳次方え去ル九日朝忠恒公より幸侃御成敗之由告來ル

忠真兄弟此由を聞しうたんかきりなし依之一族并諸臣下如雲霞之都

城へはせ參る其名を記に先一番二伊集院兵部太輔家老役未吉勝岡城主也

志嶋(24・ウ)式部太輔家老役高城之城主也都之城え居住す

同五兵衛安水弓場田口の兩城之城主なり白石太郎兵衛鷹尾口の番頭なり中村吉左衛門大

岩田口の番頭也北郷与右衛門伊集院之何某來住口の番頭都城へ居住す伊集院掃部

助幸侃三番目の舍弟志和地の城主也東郷彦右衛門中尾口の番頭なり野邊彦市梶山の城主也息金

右衛門邪答院右京葉丸四郎右衛門東シ八兵衛白石永仙紀州和歌山來

寺法印也軍法有二依て抱置なり日置善左衛門梅北の城主也息覚内洪谷仲左衛門尉

梁瀬何某梅北取添の城主なり伊集院甚吉財部の城主也後藏人と号幸侃甥也有屋田大

炊左衛門野之美谷之城主なり古垣從齊息與兵衛有屋田大炊左衛門打死之後野々美谷の城主二

成なり長崎治部左衛門(25・ウ)息久兵衛山田の城主也倉野七兵衛山之口之城主也樗木主

水介ケ同堅助倉野七兵衛打死之後山之口の城主二成なり上原肥後大岩出口の番代なり伊集院

如辰勝岡之城主也春成一忠合戦之時ハ志和地の城主也伊十院惣左衛門恒吉之城主也上野團

之助小川伴助内村半平中條助八東勘右衛門中山平太夫奈良

原清八上原清右衛門有村清兵衛息子三郎兵衛東條清閑息休右

衛門小岩屋備中同名七郎三良中村与左衛門武田豊前同名舍人

同名太兵衛小牟田清五左衛門木尾將監黒田土佐丸山源助部

入治部左衛門迫但馬大浦帶刀岩倉治部左衛門隱岐(25・ウ)筑前中

崎甚助内山主計中尾屋源四郎星能隱岐佐多次右衛門龍聞平三

須平治部猿渡肥前池口掃部阿多源次兵衛千田万左衛門川原

主膳丸山兵衛左衛門部入采女後藤甚之丞中野備前田畑弥四郎

野口隼人鳥越平六兵衛大始良加賀大始良八郎兵衛中俣玄蕃

入田肥前川嶋助太郎平岡源太堀口佐渡小野田丹後岩下石見

廣瀬勘解由野田對馬吉井伊賀溝口美濃木野田又七毛利平六兵

衛柿能登峯崎何某溝口但馬同美濃川添何某(26・ウ)羽嶋左近樋

渡肥前木場六郎三良野呂隼人歌津志摩柳橋外記前田主水内

山右近小濱三郎太次久塚奎右衛門新橋清右衛門松折源右衛門

吉見源右衛門岩次一雲岩倉丹後油木源次兵衛朝倉十助弓削源

助脇元甚五郎同弥七良丸山紀伊小ヶ倉助兵衛別府傳内左衛門

古川助太猪野又兵衛岩元行右衛門吉見左近兵衛新橋加賀谷

口伊豫山元新右衛門中津野彦左衛門石黒伊豆赤崎喜助渚原玄

蕃町田文右衛門柳田采女岡元主水川添(26・ウ)源太何れも一門諸

臣下北郷居付之家臣其外五口之外城諸臣下我先にと參上いたし忠真方へ

悔之段一々被申上ける爰に北原治部左衛門と申ハ伊十院家の一族二而

薩州伊集院のうち神殿に居住也然処ニ忠真より何れも一門不殘相談之

儀有之二依て早々都城之様に參入可致之由被申ける依之北原返事に早

幸侃御誅代并忠恒公薩州御下向之事

去程に慶長四年己未三月新日於伏見太守忠恒公北郷長千代丸え御密談に
て被仰下けるハ久しからず本領庄内本復有へしと仰ける 同九日の
朝伏見御屋敷於御数寄屋忠恒公御自身幸侃御手打二御誅代有り伐なり 是誠可為天罰

其時御側小姓仁礼小吉御手傳(21・ウ)仕ける 依之小吉へ御脇指を拝領仕な
り 行年拾有五歳也 忠恒公御屋敷下の方幸侃やしきハ上之方ニシテ殊
ニ幸侃ハ勇氣人に勝れて平生の勇氣之者共餘多召仕 其上多勢之者故御
内の人々致用心処に家康公より井伊兵部少輔直政御上使にて被仰遣候様子ハ
幸侃成敗之儀御尤被思召也 乍然幸侃屋敷程近く有之 依之万一冬夜の
儀をも仕出シ若又火杯を發候

鹿 平等の御評定にて有之

史 而は如何ニ候

只今天下の御普請二付人数三万程居合候条 人事候ハ、
為御加(22・オ)勢致遣由に
て御門番所にえ

鹿 暫被罷居ける その時忠恒公より

史 被成御座御見合ニ而候 然處

川田大膳正 吉利奎右衛門兩使にて幸侃室并家臣へ被仰渡けるハ幸侃儀
惡逆無道之依其企有無是非 被加御成敗也 息源次郎儀ハ御妹聲の故母并兄弟ま
様子有之二付 依之右兩使幸侃屋敷へ至て上意趣を申渡ける 此
て御取分之由被仰渡 依之右兩使幸侃屋敷へ至て上意趣を申渡ける 此
時吉利奎右衛門幸侃室より氏房之刀を遣ける 吉利奎右衛門幸侃室甥也 右兩使罷歸

り忠恒公へ返事趣お被申上ける 依之幸侃妻子等東福寺のごとく被參故
井伊(22・ウ)兵部少輔直政は帰宅被申ける 被成候ハ、塞不輕御懸意也、幸侃御成敗被成候ニ付而、石田治

部少輔三成ハ幸侃と別心なき中なれば五奉行等を相語らひ被申断けれハ
幸侃儀前関白秀吉公御代に昵近に被成召候者 を公儀に無御披露御成
敗被成候儀不届之由被申遣 就被仰 高雄山に御牢人候処に内府公より伊奈

圖書助御上使ニ而被仰遣けるハ 家來成敗之儀其科有間敷の由にて白鳥
并御樽肴御拝領 其後も毎度御音儘被下ける 忠恒公 伏見 高雄山より御本

復に而(23・オ)伏見御歸宅被成ける 其時 内府公より伊奈圖書助を北野邊
迄路次為 驚固と被遣ける 圖書助被申上けるハ 先以今

日 御歸宅目出度思召そ 路に 無用心騎馬百騎被遣之由被申上け
る 忠恒公被聞召 何程難有奉存候 乍然騎馬衆同心之儀は御赦免候様

にと遮而被仰分に因て圖書助不及力ニ御跡より 可參由被仰 北野馬場を二行に
備て 被參 ける 御馬之真先罷居候 故忠恒公御禮被遊御通被成候 皆々具足揃を為持 ける 其

後從内府公寺沢志摩守廣高を以忠恒公へ被仰渡けるハ 幸侃母倅源次郎
忠真定て日州庄内 居城 申 楯籠べき 急下国有て龍白え 致内談可退治
とて御暇お御給被成 遣由にて 栗毛の御馬を御拝領也 此馬庄内之陳時 内

府栗毛と忠恒公 召れたる由也 嶋津中務早々罷下り可有相談とて
内府公 意 候ニ付而則 着也 御暇被下 下國成 忠恒公より北郷長千代丸を召出され被仰下

けるハ 本領之故ハ無相違庄内を下シ可給也 其證據として正廣
之御腰物を拝領也 候 而家臣共皆々開喜悅之眉 潤三月中旬より長千代丸伏見より邪答

院え下着す 同十日北郷家臣伏見為在番人数七十 五人邪答院宮之城
(24・オ)

御光儀有 近衛左大臣殿 東福寺台長老山岡道阿弥御相伴 御馳走美々
敷御柏子五番過て還御也 同年十月薩州邪答院より北郷長千代丸行歳九
歳 伏見え夢上 相勤 長千代丸讀岐守忠虎嫡子なり 同年十二月廿五日義弘公忠恒公朝鮮

国より 直に上洛して伏見二御座有り 其 從内府公伊奈圖書助御上

使にて御樽肴御拝領 慶長四年乙亥正月二日義弘公忠恒公伏見の御城に御

登城有 同五日に 内府公は義弘公忠恒公御屋敷え御光儀有 義弘公

へ国俊の御腰物忠恒公へ長光之御腰物御拝領 同九日義弘公忠恒公へ御

城に召て高麗軍中の御感状を御頂戴成 其書二曰ク 今度朝鮮国於油川

表大明朝鮮人摧猛勢相働候処二父子不及一戦則切崩し敵三万七千 余

被打捕之段忠切無比類候 就夫為褒美薩州之内御蔵入給人分有次第一圓

被 宛行畢 目録別紙有之 并息又八郎被任少將 其上御腰物長光父

義弘え正宗の御腰物致拝領候 於當家御名譽の至候 仍出状如件 安藝

中納言輝元 慶長四年正月九日 會津中納言景勝 加賀大納言利家 江

戸内大臣家康 羽柴薩摩少將殿 斯て御知行出水高五万石目録別紙有

之 其上義弘公被任從 同年三月下旬 家康公より 忠

恒公へ御内意二而被仰けるは 御内之幸侃社薩隅日三州の守護職相望之

由隱密を以被仰下ける 忠恒公御返答ニ 幸侃儀ハ普代の家臣 其上

一族の儀ニ而御座故左様に逆心ハ

⑧企間敷之由被仰上げるハ家へ康公被聞召上此儀不真に思召翌朝四ツ

時一有御登城直に

⑨可仕候とは不存寄通御申候 石田三成承誠ニ無御存は御断 明日外

二不知様二小人衆ニ而内証より可有御出候 為案内小姓出置可申
候直二

幸侃口達可被聞召由

⑩被仰下ける 依之忠恒公翌朝御登城被成表座え蟄居ける 然る処

二家康公幸侃を被召ければ則登場仕表座へ令出仕ける

⑪被仰 翌朝四ツ時分石田治部少輔所え御出 裏座え令蟄居被成御座

候 左様候而從石田三成幸侃可被來由御使被遣候 則伺公

其時家泰公御説に幸侃ハ薩隅日三州の守護職望 隱密を以幸侃へ守護職可被仰付由御評定相極候 然る時少將

忠恒公の身のうへ如何相謀候哉 と被仰下けれハ其時幸侃 後肥後 肥前

るハ 守護職於被仰付ハ忠恒公ハ毒害仕 筑後 筑前 以上四ヶ国諸大名え此内より内談仕置申候間 居城

日州庄内拾式外城大軍を籠置謀計をめぐらし敵を責亡し降參の者共一々

に幕下に令屬守護職可相續儀疑ひ御座有間敷と申上けれハ家康公御説に

其儀おひてハ御評定之上可仰付由にて退出仕ける 忠恒公障子越二

右之趣を 被聞召驚入たる御有様ニ而家康公に被仰上げるハ 家康公

の御厚恩今に不始儀とは乍申別而此節の御厚恩生々々々 難有奉存候

由 被仰上直に御帰城被遊ける忠恒公思召給は 源氏之氏神

正八幡當家之守之神稻荷大明神之御神力を以家康公より 御知らせ可

給と御氏神を 拝礼被成ける

浦×南川×大浦×中浦×今村×安永×下財部×沢田×正壽寺×溝江×大
河原×横市×川西×前川×黒田×大崎×今平×中霧嶋×西嶽×都城×五
拾町分×權木×森本×貝本×井倉×田犬×前後檢×安久×田色×鷺巢
本村×小籠×大峯×宮丸×品水×高城×下川×石山×止川×四ツ村
宮原×星原×田尻×木之下×小谷城×今村×神田×向井×餅原×大村
牟村×櫻木×高木×大西×東霧嶋×岩満×山田×梶山×上口原×薄谷
志和地×水流×丸谷×石寺×富吉×勝岡×伊達×地村×花木×飛松×山
之口×樺山×寺狂×梅北×真金×貫夏井×野井×倉大崎×上永×古
村×野上×谷川×東郡本×以上合高八萬石幸侃押領也

時×久×入×道×於×宮×之×城×死×去×并×幸×侃×守×護×職×望×之×事×
(16・オ)

去×程×に×慶×長×元×年×正×月×太×守×義×久×公×よ×り×北×郷×久×次×郎×
久村可
を×被×召×仕×

⑧守護方より高式千石を拝領 知行肝付郡北原也 北郷家より知行三

千石配分 知行所伊牟田長野也 同年二月邪答院ノ虎居二籠峯寺を

立て陽傳東堂住持とす 同二月三日北郷左衛門佐時久入道一雲卒去

ス 法名月庭梁新庵主と号ス 雲照寺葬る

⑨就被仰出御奉公なり

同年之春山城国於伏見伊集院右衛門太夫幸侃 薩隅日三州之守護 國司職
被×仰×付×之×由×関×白×秀×吉×公×へ×隠×密×を×以×
(16・ウ) 望 訴詔の趣を言上仕申 秀吉公五

大老小早川左衛門隆景 安藝宰相輝元 加賀大納言利家 備前宰相秀家

江×戸×宰×相×家×康× 三×人×の×中×老× 小宿衆 生駒雅樂頭 中村式部少輔一氏 生駒雅樂守近世 堀尾
帶×刀×先×生×吉×晴× 五× 奉×行× 浅野彈正忠長政 前田德善院玄以法印 増田
右衛門尉長盛 石田治部少輔三成 長束大藏太輔正家

⑩へ高麗之珍物異国の唐物豊物種々致進物幸侃に薩隅日三州守護職被
仰付候様御取持奉憑之由細密」を以申上ける

⑪各一々捧數寶以細密此節之訴詔相叶候様二被申上候事寔天罰遯間敷
事なり

関×白×秀×吉×公×御×逝×去×并×家×康×公×忠×恒×公×え×幸×侃×逆×心×之×儀×御×注×進×之×事×

慶長三年八月十五日六拾餘州之大名小名を伏見之御城に召寄給ふ 其内
に關東八州太守清和天皇の廿五代の後胤源氏内大臣家康公に秀吉公仰に
我存命

⑫之限を顧に今生之縁も久しからす思也 然る時は

⑬此節迄と見

一子秀頼今年六歳 文祿三癸巳年誕生ナリ 幼少にして不知善惡」 此上ハ家康

え天下を頼也 若秀頼盛人の後日本の大小に成べき器量あらハ拾五歳に

及ば、天下を讓給へし 若器量於無 には家康永々天下の太守たるへし

天下ハ一人の天下に非ず万民の天下の為なれハ 遺言し給ひ同十八日春

秋に六拾式歳にして秀吉公薨御し給ける 故二江戸内大臣

家康公天下の將軍に奉給 慶長三年九月伏見義久公御屋敷に」 内府公

北郷時久都城ヨリ宮之城へ移幸侃ハ鹿野屋より都城え移る事

(12・ウ)

去程に文録三年の秋我朝六拾餘州ニ田地に竿入日向表は白井三郎右衛門大橋甚右衛門竿頭を取也檢地翌年の春竿を調へ文録四年の春北郷左衛門佐時久入道一雲私領日州庄内八萬石の所成けれを庄内を繰易へ伊佐郡宮之城へ召移へきの由申断に依て同四月北郷家臣先立て移りける

時久入道一雲 嫡女たみと云 鳴津右馬頭征久室 男次郎相久 去ル天正六年八月晦日 卒十年大拾九歳 同世子 男讃岐守忠虎 高麗於唐鳴病死 拾九歳成 依之舎弟宗次郎久事代なり 四番目の女子

五男宗次郎 三久 後加賀守と号す 六男 久村 七男新次郎忠頼 天正十五年六月上洛 帰国後同年二年卒 八男次郎八久栄 其外一族不殘并來住口之番頭家老土持撰津守辰綱 入道して 雲世 同息甚右衛門重綱 鷹の尾口番頭家老小杉丹後守重頼 後入道して宗文と号す 中尾口之番頭北郷次兵衛忠綱 大岩田口の番頭称寐清右衛門 財部城主北郷吉次郎忠増 高城の城主北郷又五郎久振 安永の城主北郷源左衛門久観 同小兵衛忠泰 末吉の城主北郷長門守久堯 入道して雲活と号す 同勝右衛門 恒吉の城主小杉孫右衛門 梅北の城主津輕狩之助 勝岡之城主和田民部少輔匡 梶山の城主北郷出羽守久藏 入道 傳

同喜右衛門 家老也 山之口の城主北郷大炊頭久權 山田の城主北郷式部少輔久頼 野之美谷の城主北郷善兵衛久栄 志和地之城主神田右兵衛忠綱 入道秀閑 子息語助 弓場田口の番代和田伴兵衛匡綱 五口の外城 家中之 人数一萬六千余人の内纔に相従もの 僅二 五百三拾余人召くして庄内本領京竿 高 (13・ウ)

八萬斛の半分四萬斛被宛行 同八月廿三日都城を立去邪答院宮之城へ被移ける 日州三ヶ山高千石余北郷藏入して北郷家臣ニ多田伊賀守為藏改置成邪答院ノ領分 在所を記に 時吉 鶴田 虎居 柴尾 柏原 宮之城

久留木 平川 船木 名符宿 山崎 大村 久木野 神子 中津川 黒木 佐司 長野 蘭牟田 川内 堂之原 高江 宮里 天辰 平佐 日置 川上 三ツ山 市來 薩州日置之内なり 右在所高三萬七千石余被宛行早シ 斯て文録四年九月北郷久次郎庶子分して高三萬石配分 同年十一月宮之城若宮八幡宮勸請也 北郷宗次郎三久ニ高老万五千五百斛配分す 同年十二月宮之城東谷に新地を拵へ天長寺を建て侍持覺翁上人地 本領都城へは同年八月隅州鹿野屋より 伊集院右衛門太夫 忠棟入道幸侃 同息源次郎忠真 二男小傳次 女子老入 北郷宗次郎三久室なり 三男加治木三郎五郎 四男仙次郎 其外一族諸臣下引くして 相移けり 然るに 兩年 幸侃息女宗次郎三久之室於都城死去 中又尾口に葬る 其所に阿弥陀堂を建て其馬場を極楽町と名付 今遺跡有て庄内下城之後阿弥陀堂を日州江平に被替也 北郷本領高八万石不殘幸侃押領に被任ける 也 其在所を記ニ曾於郡之内財部

には 大峯 柿木 須賀村 古井 坂元 圖師 集村 櫻木 上野 村 日光神 年久 曾於郡之内 末吉 馬場村 田還 間橋崎 梶ヶ野 鉢 中嶋 岩川 有塚 拾井村 飯田 七成 梶村 須賀 牟田 藏町 稲井 原村 源川 柳井村 鶴木 二之方 宮地 上畠 五十町 恒吉 長江 須田木 坂本 大谷 岸良 内之浦 小串村 北

所の番大將には薩摩川内平佐城主桂山城守忠房 薩州伊佐郡大口の城主新納武藏守忠元 邪答院の城主嶋津左衛門佐歳久 加治木の城主「(9・オ)肝付彈正忠 日州児湯郡新納院高城之城主山田新助有信 日向肝要の境目なれば則為太將伊集院右衛門太夫を被差向ける 然るに寄手之太將羽柴美濃守秀長 秀吉公御舍弟 大和太納言と号 因幡国之住人宮部善祥坊召くして天正十五年四月十八日に日向より打入給ふ 依之太守義弘公 忠虎を召くして根白之陣に楯籠給 其時京勢伊十院右衛門太夫 手に駈合防戦ける伊集院忠棟は以来薩摩方へ逆心有に依て」(9・ウ)諸軍兵に下知を加へければ將軍方へ奉對弓を引事非本意と致下知終には致降參天下之命に従ひ然る時は今度之奉公ニハ鉄炮之玉を不込

⑧表向計合戦いたし様ニ味方の者として見構て寄手耆人も打取事不可有と下知いたすニ依而

⑨可見繕由被申ニ付右衛門太夫手之

士卒令承知刺京勢國中ニ入り早 致降參入道して幸侃卜号 依之関白

秀吉公御感ニ入忠棟入道薩隅日三州之守護職望間敷心庭

⑩成敗如此振舞たる事尤也等の御説にて

⑪為相頭由被仰候通諸人取沙汰仕候

秀吉公は「薩州平佐を打通り泰平寺に御着陣ニ而平佐之城主桂山城守と 致防戦 勝利を 然る處ニ 國中ニ敵乱入候上は初終無覺被思召 義久

入道龍伯公秀吉公ニ 楯籠末吉 財部 安永

此三ヶ所を致驚固数日を経雖差塞義久公より降參仕へく由被仰下 依之

不及力に入道して齊名一雲卜号 羽柴 秀長 隅州於濱之市致降參ける 其時 小姓野崎丹後介猿之皮之陳羽織を着し籠を負重藤之弓を持被供ける 秀吉公隅州宮内に御滞留有り 彼地より」石田治部少輔三成 安國寺之御使ニ而時久 忠虎ニ天下直の御幕下御朱印致頂戴追てしたひ仕依之 鳴津の幕下に御免許許定畢ぬ 其時出水義虎と佐土原中務忠豊

兩家は天下直の御朱印を致頂戴 秀吉公三ヶ国御退治有に因て宮内を御發足有て大口のこつく御通道有之 於大口城主新納武藏忠元を被召出御長刀を被下 秀吉公御説ニ如何に忠元又もやと秀吉に弓を可」引かと被仰下けれハ忠元被申上けるはあらおろかなる事を被仰下者哉 今日にても義久然ニ思立於申ニハ幾度も弓を引御供の軍兵に忠元か太刀之かね之程を見度 と申上けれハ秀吉公之御説に 天晴勇士哉 秀吉公前にてケ様之心庭を不殘申段神妙之至也 ケ様成家臣数余た持たる義久を手に入事天道に為叶 とて御盃を被下ける 夫より秀吉公ハ大口を御立有て肥後の八代 豊前小倉え御着ニ而」首尾能御帰陳成し給ふ その時薩摩為人質忠棟入道幸侃

⑫伏見ニ登り令出仕ける 元來幸侃薩摩の家臣之統領成に如何專逆心を企て

⑬薩摩方三ヶ国ヲ掌ニ存募權威恣振舞 刺薩隅日三州の普代不變 不異普代 の私領地頭 替 的訴詔を秀吉公へ致言上御免許の御教書を蒙り國中を變の高地を 令改易仕置取行れける

日州庄内軍記目錄

一 関白秀吉公薩州御下向 幸侃逆心之事
一 北郷時久都城より宮之城え移 幸侃鹿野より都城へ移事
一時久入道一雲於宮之城死去 幸侃守護職望之事
一 関白秀吉公御逝去 并家康公より忠恒公え幸侃逆心之儀御注進之事
一 山城之国伏見より幸侃内室飛脚都城着 源次郎忠真之事
一 忠恒公日州御出馬之事
一 恒吉 末吉 山田三城落城之事
一 春田主左衛門尉於柳川原内村半平え對面 并平田民部左衛門 本田兵右衛門討死 并武彦左衛門ケ事
一 白石永仙依謀計鹿府勢討死之事
一 伊集院新右衛門志和地之城二後詰之事
一 内府公より庄内和平御暖二付忠真下城 諸城請取 北郷長千代丸元腹之事
一 北郷次郎忠能宮之城より都城え帰国 并伊十院新右衛門 上村奎之助
右馬頭征久奉公 白石永仙被行死罪之事
一 太守忠恒公御上洛 并日州於野尻忠真怪矢當 忠真舍弟於諸所誅伐之事

日州庄内軍記

関白秀吉公薩州御下向 幸侃逆心之事

幾星としを經而 爰に薩隅日三州之守護鳴津十六代修理太夫義久公 御名ヲ 龍伯公ト

号ス 御男子なきに依て御舍弟兵庫頭忠平公為御名代義弘公ト号ス 後惟新公ト号ス 御嫡又市郎久保 文録一癸巳年九月九日朝鮮国於唐嶋御病死 一唯如參ト号ス 御二男又八

郎忠恒公 慶長十二丙卯年六月十七日山城国於伏見 内府公ヨリ 家久公に任せらる 長光之御腰物御拝領 寛永三年八月九日中納言任る 義久公の御息女を嫁して守護職に連續す 十八代忠恒公之御

時之家臣伊集院右衛門太夫忠棟 入道して幸侃ト号ス 執權相勸隅州肝付郡鹿野屋之城主也 然に 幸侃逆心之根本を尋に日州児湯郡都於郡に住

伊東入道藤原義祐薩摩方え逆心を記し約諾をして 豊後国大友左右衛門佐義鎮 同新三郎義統を頼ミ薩摩方へ 弓を引可給由頼に打頼に依

て天正六年十二月十二日に日州児湯郡新納院高城に豊後 之軍士を引率して薩摩方へ駈向ふ 雖合戦

不得勝利 大軍敗北して

被切崩悉破壊壞々纔生残豊後え帰る也 夫より以来天正十四歳之暮に至て九州 嶋津幕下に屬ス 然に依て

前関白大政大臣従一位豊臣秀吉公太將軍為国暖天正十四年十二月三日長曾我部左衛門三郎 仙石仙兵衛兩將を被召下処ニ薩摩方致防戦追散ス

に依て 秀吉公御自身に御進發之旨諸國ニうさつを以觸渡ス 天正十五年丁巳四月為退治九州 下向有 也 國衆悉秀吉之味方ニ被參候 依之薩摩方他国境関

依之薩摩方他国境関

依之薩摩方他国境関

依之薩摩方他国境関

依之薩摩方他国境関

依之薩摩方他国境関

依之薩摩方他国境関

依之薩摩方他国境関

依之薩摩方他国境関

依之薩摩方他国境関

依之薩摩方他国境関

幸侃 同息源次郎忠真妻子」^(3・ウ) 其外一族諸臣下召連れ同年秋之比隅

州肝付郡鹿野屋より庄内都城に被移ける いよ／＼榮花にほこり剩

逆心を企て義弘公^{義久公の御舍弟 兵庫守 後に惟新公と号す} 忠恒公^{義弘公の御子也 義久}

公の御息女嫁して守護職に任せられける

御代に至て幸侃隱密已に露顕するに依而

仁王百八代の後陽成院御宇慶長四年^己 閏三月九日山城之國伏見於御

屋形忠恒公御自身忠棟を御打有 其遺恨に依而源次郎忠真私領日州

庄内都城^并 恒吉」^(4・オ) 財部 安永 山田 野々美谷 志和地 高城 山

之口 勝岡 梶山 梅北以上拾式の外城の諸軍兵家中の臣下楯籠雖

及合戦今に始絡分時ならず 殊に延宝^丙 年に至て已に星歳を経て丸

七拾有八年二及故委敷其段不相知 古老の老の者も闇にして其断を

忘却す 或は其比幼童にして委細をしらす しかのミならず雜日記

等も致焼失に依而庄内合戦始終記録にしかたし 爰に北郷家臣藤原

「^(4・ウ) 重昌 安陪氏安正 釋役氏秀政此三愚者時々致内談古をさくり

今を尋ね相厲といへ共求所不相達 後悔至也 雖然日州安永住人北

郷家臣和田三右衛門 大江氏匡盛^{北郷善兵衛久栄三男 諸兵衛久利嫡 三左衛門久綱に達}

す 和田兵左衛門匡盛親父なり 古老者尋令聞書 其古老已は久木村源左工門

瀬戸山郷右衛門 中條九郎兵衛此三老の者覚書有之 郡本の住士川

口傳左工門重義入道壽濟^{諸兵衛親父なり} 當歳八拾六歳庄内合戦之時ハ」

^(5・オ) 九歳之由也 北郷譜代なれ共幼父にはなれせんかたなくに依而邪

答院に不移 無是非忠真臣下に成たる故に伊十院方粗物語聞書被致

當時美作守臣下日州諸縣郡繩瀬の住士上原清右衛門平氏尚重^{主水介}

^{親父也} 年九拾三歳 庄内合戦の時は拾三歳之由也 都城大岩田口の住

士格之普代上原肥後守嫡也 夫二依而伊集院方委敷物語致聞書 梶

山の住士」^(5・ウ) 久保新八秀定^{今采女詮父也} 行年拾六歳にて邪答院大村に移

す 廿年之時に庄内及合戦致出陳安永に松ヶ尾にて矢疵を蒙り宮丸

在郷放火人数等子孫に語傳也 是を記し都城住士池袋甚兵衛平氏益

宗邪答院に移時に代高目録所持に依て是を写ス 移人数帳今に見

出 残念也 同所の住士坂本仙兵衛平氏盛常庄内諸地頭日記所持

是を写ス 石塚源右衛門^{四郎左衛門親父也} 當年九拾三歳 庄内合戦の」^(6・オ)

時は拾六歳ニシテ高城之城主籠故大楽^口 物語致聞書 三保高城の住

士大井五兵衛源氏義長庄内合戦の聞書所持 是を写畢^ヌ 誠に他嘲

を不顧漸綴を以為軍記一卷後世物語其為成記之也

⑤ 所々領地也 僅亦從日新公肝付之清朝え貴久公御事ヲ向後頼被思召

通御意御座候二付折々御見舞被成候 有時於南林寺洲崎二夜一期之

御遊興有之候刻伊集院右衛門太夫忠棟至藥丸彈正 とても御馳走

二鶴料理進せ候半ものをと被仰候 珍敷御挨拶二而候 左候ハ、肝

付え御出候得 狐料理いたし御會尺可仕由彈正返答被申候 其夜伊

集院右衛門太夫下知ヲ以清朝幕之紋足一方引上たる鶴之為立足を忍

て被切候 清朝承 ケ様ニ恥辱を士二不當物ニ而候由言捨而被歸候

伊集院右衛門太夫ハ野心カ不思議^{マヤ}と諸人取沙汰申候 是肝付合戦

之初也

照して示した。漢字平仮名交り文と（変体）漢文の違いがある為、助詞の有無や、漢字で読みの通じるもの（固有名詞を除く）等は無視して記さなかった。又、都城島津家蔵本（口）にないところは×印で示すことにした。



日×州×庄内軍記

鎮西薩隅日三州之守護嶋津殿と奉申ハ忝も本朝の帝五拾六代清和天皇惟仁十代後胤正二位大納言大將大政大臣源頼朝卿三男嶋津又三郎後判官号忠久公と仁王八拾二代後鳥羽院御宇頼朝卿より薩隅日三州ヲ被宛行建久七丙辰歳忠久公行年拾有八年ナリ薩州出水郡山院門に八月廿三日に御下着也其後日州諸縣郡庄内嶋津の庄今嶋戸ト言又郡元ト言の御館に（1・オ）御座して今は薩州鹿府に御本城なり今御本城は坂元の内なり三ヶ国は譜代不變の御領也忠久公仁王八拾代高倉院御宇治承三年十二月晦日攝州於住吉御誕生なりより四代忠宗公に至て第六番目の御子嶋津七郎左衛門尉資忠是七人嶋津之内北郷家先祖なり大守嶋津氏久公致奉供仁王九拾八代崇光院御宇觀應二年に上洛して清和天皇十五代源氏足利尊氏將軍奉仕同年九月廿八日筑前国金隈の城合戦に嶋津六代氏久公御發向ス其時資忠は一色（1・ウ）右馬頭範元手光に属して致出陳令高名其軍忠勝初手二依而仁王九拾代の後光嚴院御宇文和二年癸亥二月九日尾張守に住ス任同四年十二月十二日尊氏卿より日州庄内北郷院三百町被宛行尊氏卿御感

状有也其時北郷尾張守資忠に任すル山久院殿月要道明号今案奉るに永山久院是也其上舍兄上総介貞久公より隅州曾於郡財部院被宛行御感状有ヲ經数代恒吉永吉内之浦三ヶ所合百八拾町軍忠に依て（2・オ）被為附ける末吉三百五拾町梅北百八拾町中郷三百町右同断梶山勝岡山之口高城池和田野之美谷ハ伊東北原雖為押領ノ地と忠相武威を働ます依之伏來故

從令領地以來幾星歳を経て嶋津十六代義久公の御時の長臣一門中に伊集院右衛門太夫忠棟入道幸侃と言ウ者有高祖忠久公より三代下野守久經公の舍弟五郎常陸助忠經の四男侍從房俊忠其子伊十院圖書久兼同圖書助久親（2・ウ）同藏人頭忠親伊十院長門守忠国大隅守久氏同彈正少弼頼久四番目大和守隆久忠公明（今）大和守忠倉源太忠金後に右衛門太夫忠棟と号す弟式部少輔ハ比志嶋相續して義知入道清安と号す弟掃部介と相續然るに謀略以豊臣朝臣將軍前関白秀吉公に嶋津領内国替之訴詔を致言上御免許に依而仁王百八代後陽成院御宇文録四年の夏の比北郷家九代左衛門佐時久入道一雲同（3・オ）讃岐守忠虎文録元壬辰年二月高麗二出陳同三歳十二月十四日高麗唐嶋二而卒行年二拾有九歳也子息長千代丸天正八年庚子誕生行年六歳忠虎舍弟宗次郎三久後（ママ）賀加守と号す久次郎久村天正年中三死去なり新次郎久栄為國替薩州伊佐郡邪答院宮之城に被移ける相隨人数庄内拾式外城に臣下壹萬六千人の内纔に五百三十余人相具して四月より家臣先立同八月廿三日都城を明渡シ同廿六日宮之城に到着す去程に伊十院右衛門太夫忠棟入道

翻刻 鹿児島県立図書館蔵『日州庄内軍記』

橋口 晋 作

先に、筆者は、『研究年報』の第十一号と第十二号とに互って、『庄内軍記』の一系統をなす都城市立図書館蔵本と鹿児島県立図書館蔵本（イ）の異文（語句）を表示して、前者を翻刻した都城史談会本の不備を（不完全ながら）補おうと試みた。

今回、ここに翻刻し、紹介しようとしているものは、鹿児島県立図書館が所蔵する、これとは別系統の「庄内軍記」である。同本の書誌を記すと、

写本。零本一冊。前書き 六丁弱。目録一丁強。本文 二十七丁。

内題「日州庄内軍記」右墨付き以外の原体 不明。

の通りである。零本であるが、同系統の完本に、都城島津家蔵本（ロ）や佐土原島津家蔵本がある。ただし、同系統と言っても、部分的に、増補改訂による違いがかなり認められる（校異、参照）。都城島津家蔵本（ロ）と佐土原島津家蔵本は極めて近いが、表現の細部において、都城島津家蔵本（ロ）がより鹿児島県立図書館蔵『日州庄内軍記』に近い。

本稿では、『日州庄内軍記』を翻刻すると共に、都城島津家蔵本（ロ）との違いをその転写本である東京大学史料編纂所蔵本（ロ）に依って記す

ことにした。都城島津家蔵本（ロ）には、本文末に「右一卷 庄内衆大塚源右衛門高城箴城陣中之日々記庄内軍之聞書ト云一卷所写之也」という奥書があり（佐土原島津家蔵本にはない）、東京大学史料編纂所蔵本（ロ）には、更に、「右庄内軍記一卷 日向國北諸縣郡都城嶋津家蔵本 明治二十年十一月編修 久米邦武文書採訪ノ時同郡役所ニ托シテ之ヲ謄寫ス」という奥書が付いている。

『日州庄内軍記』と都城島津家蔵本（ロ）とを比べて、第一に気付くことは、『日州庄内軍記』が「目録」を有し、従って、「目録」以前の前書きというべき部分と本文とを明瞭に区別し、且つ、本文を章段分けしているということである（佐土原島津家蔵本は都城島津家蔵本（ロ）に同じ）。このことから、『日州庄内軍記』は、物語としてより整理されたものと考えられる。又、『日州庄内軍記』には、『庄内陣記』と共通する記事も見られるが、諸本の関係については後日を期したい。

猶お、都城島津家蔵本のうち、『庄内軍記 上（下）』とある二冊本（イ）は先の都城市立図書館蔵本・鹿児島県立図書館蔵本（イ）の系統本であり、『庄内軍記拾遺』は鹿児島県立図書館蔵本（イ）の「附 拾遺」にほぼ一致すると見られる（東京大学史料編纂所蔵の転写本に依った）。

翻刻にあたり、読めなかった文字には□を宛て、二行書きの割注は都合により一行にして細字で示した。体裁は『日州庄内軍記』本文の右に東京大学史料編纂所蔵本（ロ）に依る都城島津家蔵本（ロ）の違いを原則として記す（細字で）ことにしたが、改訂の著しい部分は鹿④史の下に対